
俺がここで生きるわけ

tyimo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺がここで生きるわけ

【Nコード】

N3578Y

【作者名】

tyimo

【あらすじ】

いきなり、異世界へと飛ばされた青年は何を見何をなすのか。主人公最強系です。シリアス有り、コメディー成分少々？で行こうと考えてます。

いつかの日に・・・

「しらない天じよ・・・なわけないか」

見知った宿の天井を見ながら起き上がる。その部屋は8畳ほど大きな二人部屋でシングルサイズの木で出来たベット二つに小さな四角いテーブルと木製の丸イス、あとは荷物をしまふ鍵付きの戸棚しかない。

ここに来て、はじめての冬がまもなく終わろうとしている。この世界にきてはや8ヶ月、最近はやく落ち着いてきた。といっても、いまだ知らない事の方が多いし何よりこの世界<アルベリアン>のをすべて見て廻ったわけでもない。まあ、この広大な世界を徒歩で廻ろうとすれば、死ぬまで続く旅になりかねないし、それですら終わるかどうかわからなのだ。今のところ、する気はないが。

そういえばと、隣のベット見ると分厚めの布に包まる様にして熟睡する相棒がいた。もうそろそろ、1階の食堂が開くころだと時計に目線を送り、<6時42分>と表示されているのを確認すると、相棒をたたき起こす為にベットから立ち上がり相棒が包まっている布に手をかけ、一気に剥ぎ取る。

そこには、輝くような金色の髪と色素の薄い年齢相当の(16歳らしい)うつすら微笑みを浮かべているような愛らしい顔が見える。窓から差し込む光から逃げるように寝返り打ち、うっうっ唸っている。野宿しているときにはすぐ起きるのにと、内心ため息を吐きつつ肩を揺らす。

「起きろ〜朝だぞ〜」

「あ〜さ〜なの〜?」

少し薄目を開けつつこちらを胡乱な目で見てくる。少しつり上がった目元、藍色というより空色に近い瞳は視線を彷徨はせつつ、間延びした声で聞いてくる。

「ああ、朝飯の時間だ。ほら、さっさと着替えて顔洗いにいくぞ」
手ばやく着替えてタオルを肩に掛ける。そのまま部屋を出て廊下を右へ、階段の方へと狭い通路を歩きそのまま1階に下りるとバツタリと宿の女将さんと出会う。

「おはようございます。井戸借りますよ」

「ああ、おはよう。もうご飯出来てるから」

「今日の朝飯はなんですか？」

「昨日、あんた等が取ってきた肉あったろ？晩飯には間に合わなかったからね、そのぶん下ごしらえに時間掛けたから自信あるよ」

「そうなんですか？それは、楽しみですな」

「あれ？ユウもう顔洗ったの？あ、女将さんおはようございます」
メイが階段から降りてきた。もうすっかり目ざめたようだ。綺麗な金色の髪は肩の辺りで少し跳ねてしまっているが、いつもの事なので気にしない。最終的に三つ編みになってしまっしな、だからと言って別に三つ編みも嫌いじゃ無いが。

「おはようメイちゃん。ほら、あんたも顔洗つといい」

はいと返事して裏にある井戸にメイと向かう。ここでは水道なんて無い、昔ながらの滑車式の井戸だ。紐付きの桶を井戸に落とし引き上げる。たらいにそそぎ、顔を洗う。かなり冷たい、しっかり洗うと指先の感覚が無くなってきた。さっさと切り上げてタオルで拭く。隣で顔を洗っていたメイが寒い寒いと手に息を吹きかけている。俺も寒いので、早く中に戻ろう。

食堂に入りカウンタで朝飯を貰い、席についていただきますと呟く。今日の朝ごはんは昨日狩った牛系の魔物<ヘイバファロー>と言う魔物で、見た目が醜悪な割りにその肉は美味という物だ。数日前から近くの草原に出没し討伐依頼が出ていて近くを通ると無条件で襲ってくる。敵が強かろうが弱かろうがお構い無しって言うのは、魔物とはいえ動物なのだからどうなのかと。その群れを狩った俺たちは角や皮、そして大量の牛？肉を剥ぎ取り、帰って市で皮と肉の大半を売り払うと、その足でギルドの支店（酒場に併設されている）に向かい依頼達成条件の角を出して賞金を貰ったのだった。――かなり説明くさくなってしまったが（しかもかなり端折ってだが）《、そんなことより飯、飯。パンとスープ、あとサラダに塩、胡椒の利いた肉が山盛りになっている。かなりおまけして貰えた様だ。こってりとした肉と、サラダが箸休めと（ナイフとフォークだが）なっていくだけでも食べられそうだった。たらふく食べてハーブティーを啜っていると黙々と食べていたメイが食べ終わったようなので話しかける。

「今日はどうする？また、討伐系探すか？」

「うーん、それも良いけど。もうそろそろ春になるでしょ？だから、今後の移動も含めての情報を集めましょうよ」

「そうか、後3日もすれば暦の上では春だもんな」

たしかにまだ朝晩は寒いが日中はだいぶ暖かくなりつつある。旅の再開を考えなきゃならん時期だ。そのためには情報が必要で、聞くのは商人、それも旅商人がいい。そう考え頷きながら答えた。

「っで？次の目的地はどこなんだ？」

次の村か街かは知らないがどの位の日数が掛かるかで準備すべきものも変わってくる。と言っても、見た目は軽装の旅人な感じになるだろうが。俺が持っているショルダーバック、見た目は小さいが、空間魔法が掛かっていてかなりの収納能力を持っているから運ぶのは簡単だ。ちなみに、メイも同じようなものを持ってる。結構な値段がしたが、かなり便利なのでしょうがない。必要経費という奴だ。

「ねえ、聞いてるの？ポーっとしちやってどうしたのよ？」

「いや、なんでもない。っで？なんだっけ？」

「は〜っ。もう、もう一度言うからちゃんと聞いてよ。次の街は、<リギンガーデン>って言うところ、この、<サムズの村>から歩いて4、5日ってところだけだ」

ちなみに、サムズの由来は初代村長との事。前に女将に聞いたんだが、村の場合、村長の名か特産品の名が多いらしい。

「そっか。んじゃ、とりあえず市に行くか」

「うん、それじゃ行きましょ」

そう言ってメイは立ち上がり皿をカウンタのほうに持っていく。俺もそれに倣い皿を返すと部屋に戻り一応装備を整え、っといつても剣を背負ってベルトを止めただけだ。メイも準備が出来たようなの

で、外に出る。宿の前の赤茶けた道を左に行つた先に小さいながらも広場があり、そこに3軒ほどの露天がある。そこで情報収集と云うわけだ。露天は木と布でできた壁の無いテントといった感じで、保存の利く食料品やら布やらを扱っているのだ。

「よう、おっさん久しぶり」

「おう、坊主たちなんか欲しい物でもできたか？」

「まあね、保存食ある？あと、リギンガーデンについてなんか知らない？」

「保存食ならこれがお勧めだな、リギンガーデンか・・・あそこは特に無いが、そういえばそこに行く道中に盗賊が出たって話を聞いたぞ」

「じゃあ、それを一週間分もらえますか？あとそれは、いつごろの話なのですか？」

メイが身を乗り出した。まあ、盗賊などどこにでもいるもんだが。メイは正義感がやたら強くその手の輩に容赦しないからな。もしあったら、間違いなく血祭りだろう。「合掌」

まあ、俺もかかってきたら容赦はしないがww

「あいよ！銀貨6枚と貴銅貨3枚だな、あんがとよ。だいたい、4日位前だな。襲われた奴が言うには、いきなり奇襲されたんだが何にも取られなかったと、だが矢が飛んできてすぐ横に刺さったときは死ぬかと思つたぞうだ」

「それでも、何も取られなかったって運がいいな。はいお金」

シオルダーバツクから皮袋を取り出しお金を払う。

「ほんとにね、奇襲で逃げられるなんてよっぽど弱い奴らなのね」
ちよっつメイお前ひどww

「ほらよ！なんか最近こつちに流れてきた連中らしい。そういや、リギンガーデンの事聞いてきたって事は行くのか？」

「ああ」

「ええ」

「そうか、気をつけるよ。って言ってもお前らには必要ないな」

そう言っつてガツハツハと笑うおっさん。

「気をつけますよ。俺は何事も慎重にがモットーですが」

「でも、あん時はずいぶん豪胆だったじゃねえか」

「それは、何度も言っているようにメイの奴が飛び出して行っつちま
つたから仕方なくですよ」

「なんだかメイがこちらを睨んでいるが気にしない。気にしちゃいけないんだ。」

「それでも、俺は助かった。ホントありがとな」

「その話はもういいです。んじゃ、俺たちはもう行きます。またどこかで逢えたらいいですね」

「おう、またどこかでな」

買い物も終わりギルドのほうに向かう途中後ろに怒気が・・・
誰だかはわかってるが、振り向きたくないな〜と思っていると、
やはりメイが文句を言ってくる

「さっきのまるで私が猪突猛進みたいじゃない!!」

「否定できないだろ？いつも一人先走っていくし、危ないからって
言っても問題ごと突っ込んでいくしな」

「私って、そんなに迷惑掛けてる？」

悲しげな声の響きが俺の心をグサリと抉るが、ここはちゃんと
言っておかねばと心を鬼にして言う。

「迷惑ってほどじゃないが、よく考えて行動しろって。困っている
人を助けるのはメイの美德だが、話を最後まで聞かずに飛び出して
いくのは悪い癖だぞ」

うん。分ってはいるんだけど。と言っているが今のところ直る兆し
は見えていない。行動力があるということは素直に羨ましいが、い
つも巻き込まれ解決する俺のみにもなってくれ。おっと、ギルドに
着いた。古い木製の扉を開け中に入りテーブルの脇を通り奥にある
掲示板を見に行く。先程の盗賊の討伐依頼出てないかな、

う〜〜ん・・・

出てないみたいだ。しょうがないとりあえずカウンタに行こう。

カウンタに並び2名ほど前に並んでいたが直ぐに順番がきた。ここ
一ヶ月このギルドで稼いでいたため、すっかり顔なじみになったおじ
さんが声を掛けてくる。

「お？ユウ珍しいな二日連続で来るなんて、なにかあったのか？」
いま俺達は、一度依頼を達成した後1〜2日は休みを取る様にして
いる。毎日依頼をこなしても問題ないが、他の冒険者の仕事を取り

上げかねないために自重しているのだ。前にそれで問題になったし。「ええ、もうそろそろ春になるんで。次の街にでも行くとかと、その挨拶に……」

そうか、残念だとカウンタのおじさんは笑って手を差し出し握手して、これからも頑張れよと声を掛けてくれた。ここみたいに小さい村だと酒場や宿屋と一緒にいるところが多い。メイとも握手を交わしたのち、ギルドを後にする。宿に戻ると、窓を拭いている宿のご主人がこちらに気づいた。

「おかえりなさい。早いですね、あつ昨日はお肉ありがとうございました。」

「いえいえ、急なんですけど俺たち明日旅にでるんです。そのために、準備しないといけないですからね」

「そうですか、もう春ですからね。見送る者にとってはさびしい季節です。でもまあ、新しい出会いもありますしそれも楽しみですが。」

そうですね。と言って部屋の中に戻り明日の出発に備える。夕食を食べ終えすっかり暗くなった空を窓べから見上げる、澄んだ空気の雲ひとつ無い中に月がポツンと浮かんでおり、なんだか寂しそうに見えた。それを見ながら、今までのの出来事を思い出す。

出会いと別れ。

判っていても別れは悲しく寂しいものだ。それが、今生の別れとなれば尚更だった。まあ、死別した訳ではないが二度と会えない事は確かだしな。この世界で生きるしかない俺にはどうしようもない物

だ。でも・・・思い出す位・・・いいよな・・・

空の上、月の柔らかな光がこの世界を包み込んでいる気がした。

いつかの日に・・・(後書き)

前に投稿したものを書き直したので、投稿します。余り変わって無いかも知れません。

俺が飛ばされるまで

俺の名前は、加賀美^{かがみ} 結城^{ゆじき}（21）ごく普通の一般人だった。

だったと言うのも、まさかの異世界へ飛ばされてしまったからなのだが。

ちなみに、俺の容姿は中の中ぐらい（少したれ目が気になる、身長は175センチとやたらと平均的だ。

趣味は機械いじり（車やパソコン）と小説を読む事（かなりの雑食で最近のブームは異世界トリップ物。やっぱ冒険は男のロマンだよね

その日、いつものどろりに仕事を終えた俺は、仕事場のすぐ近くのスーパーへ買い物に来ていた。

明日が非番日の為いつもより多めの食料と酒（そんなに飲めない為少量だが・・・）を買い込み、車に乗り込む。

この車は高校卒業と同時に就職した俺に、祖母ちゃんが買ってくれたシルバーの軽自動車で、

中古で車検付き20万と言う激安車（まさかの高年式）という年数が経っていないにも係わらずそこら中、故障だらけの愛車だ。

ヒーター点ければ10回に1回はエンストするし、坂道では凄まじく回転を上げないと（5000rpm位）登らない。

でも、せっかく年金暮らしの祖母ちゃんに買ってもらったのだからと騙し騙し乗っていたんだ。

そんなオンボロ車で家へと向かう途中、交差点の先頭で赤信号になり止まって待つ。信号が青になったため走り出そうとアクセルを踏み込んだ瞬間にエンスト。

一瞬焦るがいつもの事なので、瞬時にクラッチを踏み込みアクセルを煽りつつ、セルを回す。
キウルキウルとセルが廻りブォンッとエンジンが掛かりクラッチを放すとやっとな走り出した。

後ろを待たせては居なかったかとバックミラーを確認してみたが、さすが田舎（ドが付くほど）1台も並んでなんか居なかった。すぐに前方へと視線を戻そうとした時、そこで異変に気づいた。

信号無視で横から迫るトラックを。

とっさにハンドルを左に切るが間に合いそうに無い事は誰の目にも明らかだったろう。

大きな質量同士がぶつかる大音響が鼓膜に響き、右からの衝撃にエアバックが開く。胸と顔を強打し振り返りでバックレストに後頭部を打つ、意識の糸はそこで途切れた。

その現場を見た主婦は、軽自動車の運転手は死んだと直感で判つたらしい。軽自動車はトラックにぶつけられ電柱との間にはさまれて運転席どころかほぼすべてに渡って潰れ原型を留めなかった。その軽自動車は幅が1m50cmほどあったのが、90cmほどになったのだからよほどの衝突のエネルギーが凄まじいことを物語っていた。

何も無い空間、いや・光しかない空間と言ったほうが近いだろう。光と言っても強い光ではなく、淡く儂い灯り。何処からとも無く照らされた光は光源が確認できない不思議な光だった。

「面倒なことになったのう・・・」
白い布をまっとうした老人が呟く

「ごめんなさい。お父様」
闇を纏った少女は顔を俯けて泣きそうな声で謝罪の言葉を紡ぐ

「なってしまったものはしょうがないじゃろう。それより、これからの事じゃ」
まさしくその通りだった。老人と少女の前には一人の少年が淡い光に包まれて1メートル程の空中に横たわっていた。事故に合った筈の彼は何の欠損も無くきれいなままだった。

「下界に戻すことは出来ないのですか？」
少女が尋ねる。そんなことは出来ないのは重々承知していたが、それでも一縷の望みを掛けて。

「判っておろう、此処に連れて来た時点で魂の変容が始まっている。このまま進まば人ではない何かになってしまおうじゃろう。このまま返せば、今の文明が崩壊しかねん」

老人は厳しい顔でそう言いきった。少女は其れでも、と食い下がる。「マールヤ文明はそれで崩壊したのじゃ、忘れたか」

「.....」

沈黙がその場を支配し重い雰囲気が出た。

暫らくして不意に老人が口を開いた。

「方法はある。転生させるか、あるいは.....」

だが、転生させるにもこのままでは無理なことはわかっている。転生させるとしたら、我々の介在の名残を消す為に悠久の時が必要だろう。

それでは、この青年があまりにも可哀想であるし、事の発端はこちらにあるのだ。だからこそ、対応に困るのじゃが

「他に何か方法が？」

「ヤーベエの世界へ飛んで貰う。奴のところならば、今までに頼まれて何人も送っておるからの。こんなケースは始めてじゃが」
それならば何とかなるじゃろうと、少女の方へ微笑みを見せる。

少女が安堵するように胸を撫で下ろしたのを見届けると、老人は少し上を向いてそこに居ない誰かへと語りかけはじめた。

いくつ時が経ったのだろうか、老人はここに居ぬ誰かにすまぬと話し会話を閉じた。

彼は、少女の方へ向き直ると話をついたと満足げに微笑んだ。

さてと、さつそく行って貰おうと老人は右手を挙げると、10メートルは在ろうかという巨大な白く聳える門を目の前に出現させる。その、荘厳な門は細やかな装飾が施されており、見る者を圧倒する雰囲気醸し出す。

ギギギツと門が開き始め、扉が完全に開くとその先は眩い光で満ち溢れていた。そこへ青年は吸い込まれる様に消えていった。そして青年が消えると、門は閉まり跡形も無く消えさった。その場がまた、静寂に包まれる。

「結城よ、そなたの新しき人生に幸多からん事を……」
その場に残った老人が何かの所作か左手を胸に手を当てて、右手の指先でなにかを描き呟く。

「結城さんごめんなさい……」
闇を纏った少女は、すまなそうに呟いた。

俺が飛ばされるまで（後書き）

2話目も焼き直したものです。そんなに変わってないのです。しかも短くなってしまった、だが、後悔はしてない（キリ
ここから先は書下ろしです。明日には投稿できるかも？

誤字、脱字、報告ありましたら、よろしくおねがいします。でわで
わ

異世界降臨と初戦闘は？

さらさらとやさしい風が前髪を撫でる。木陰からもれる木漏れ日の光が、瞼のうちにある瞳に届き意識を刺激する。彼は、まどろみから目覚め瞼を開く。

「うっむうっ」

起き抜けの頭はいつこうに働かず、目の前の光景をただぼんやりと映すだけだった。初夏のような、暑いとは言えないからりとした空気が、とりあえずと、体を起こし周りを見渡す。そこには見渡す限りの鮮やかな緑と大地の息吹を感じさせる茶色、そこらじゅうに聳える巨木とそこに差し込む光の筋は幻想的で思わず見とれてしまった。

《私の声が聞こえてますか？》

爽やかな優しい鈴の音のような声が耳に響く。

突然の声に急いで立ち上がり、キョロキョロと辺りを探してみる。周りに人は1人も居ない、それどころかこんな自然の中だということに小鳥のさえずりさえなかつた。すこし不気味に思いつつ身構えていると、また声が聞こえた。

《落ち着いてください。私は其処に居ません》

(ここに居ない？どう言う事だ？) 疑問に思いつつ声を上げた。まづは意思疎通しないと進まなそうだ。

「あなたは誰だ？そしてここはどこなんだ？」

するとすぐに返事が返ってきた。

《私はこの世界の上位神で、ミッテと言います。此処は何処かと聞かれると、何と言って良いんでしょうか》

「神様？ほんとに居たのか・・・でも、ここが分からないってどういうことだ？日本じゃないのか？」

神様なんてもつと上から物言いしてくるもんだと思ってたが、どうも違ったようだ。こちらが落ち着くようにゆっくりと語りかけてくる。

《いえ、此処は貴方の居た世界ではありません。此処はアルベリアンと呼ばれています》

「アルベリアン？聞いたこと無いな。って事は、ここはいわゆる異世界なのか？」

《はい、その通りです。今居るこの森はモント共和国内のニズク山と呼ばれてますね》

衝撃の事実をさらりと告げるミツテと名乗る声。

「山？確かに僅かだが上に向かって傾斜している様にも見えるが」

《何か聞きたい事は有りませんか？あまり時間が有りませんが》

「なぜ？」

急に時間が無いといわれても困るんだが。ここには、俺とミツテしか居ない。頼れるのはミツテしかないのだ。って言っても厳密にはミツテがこの場には居ないが。

《今の私が世界に干渉するには私と波長の合う、物者に協力してもらわなくてはなりません。ですが、波長の合う者は少なくその者にも負担になります。特別な装置神殿があれば声を届けるくらいできるのですが》

と言うことは、俺が波長が合うつて事か。今の所、負担を感じては居ないが時間が無いなら急いで聞かなくちゃならない事を纏めなくてとはと、考え始める。

今更だが、なぜ俺がここに居るのか聞か無くてはならないだろう。あとは、この世界がどう言った所なのかと言った所だろう。そう考え、声を出そうとしたところで向こうからの声が先に出た。

《先に何故貴方が此処に居るのか答えなければ為りませんでしたね。それは、貴方の居た世界の神が貴方を此方に送って遣したからです。今までも、貴方の居た世界から人を送って貰う事は有ったのですが、向こうから送られてきたのは初めてです。此れまでは、此方から頼んで送ってもらっていたんです。あと、此方は貴方の知識にあつた中世と同じと考えて貰って構いません。ただ、そちらには無い魔法があります》

今さらつと魔法の言葉が出たな。ってか俺の知識つて事は俺の思考が読めるのか。道理で、耳で聞いているというより頭に直接響くような気がするのか。まあ、そんな事より今まで色々有り過ぎて忘れていたが、帰れるかどうか聞かなくてはと思った矢先、次の瞬間その考えが打ち砕かれることと為つた。

《残念ですが、貴方は元の世界に戻ることは出来ません。此処は貴方が居た世界より下位の世界なのです。水が低きに流れる様に、上位世界には行く事登るが出来ません。ですので、貴方には此方で生きて頂きます》

それを聞いた俺は、ガツクリと頂垂れ絶望を味わつた。だがそこである事を思い出す。異世界トリップしかも上位世界から来たつて事はテンプレで言う所のチートな能力があつたりするのか？そう考えると、なんだかやる気が出てきた気がする。

《確かに、貴方が此方に来たことで力を得ているでしょう。ですが、私から貴方に与えられる能力は殆どと言って良いほどありません。なぜなら、貴方の中に私にも判らない力が宿っていて、その力が殆どの領分を占めています》
わからない力ってなんだ。っと心の中で突っ込みを入れつつ、これから必要になるであろう言葉や文字に対する物は教えてもらえるのか心で聞いてみた。何て言っても、意思疎通は重要だしと、前会社に居た中国から来た伴君も最初は大変だったとしみじみ思う。

《その程度なら大丈夫です。今のままでも、話すのは問題無いでしょう。文字の方も判る様にしておきますね》

そう言った直後に頭に急激な負担が掛かり、まるで知恵熱の様な症状が出た。っと言っても、ほんの1〜2分で収まり溜め息が出た。なぜか今は頭がすつきりしている。ミツテが言語のほかになにかしてくれたのだろうか。

《もうそろそろ時間のようです。あと、ポケットに入っているものは冒険者ギルドのカードです。身分証の代わりになっているので失くさない様に気を付けて下さい。この山を越えた先に1番近い村がありますのでまずは其処を目指してみても如何でしょうか？。では何かあれば神殿でお会いしましょう。あっそうでした、魔物も出ますのでそちらも御気を付けて……》
そう言い、ミツテの声が聞こえなくなった。しばらくすると徐々に周りの音が聞こえ出し、木のさざめきや鳥達の鳴き声が戻り始める。最後に気になることを言っていたような気がするが、ギルドカードの方が気になり、先程まで気がつかなかった、ポケットのふくらみに手を入れてカードを取り出す。金属の様な光沢の白いカードで、大きさは免許証をふた周りほど大きくした物だ。
そこには、こう書かれていた。

表には、

名前 加賀美^{かがみ} 結城^{ゆうき}

種族 人間

年齢 21

出身

性別 男

ランク F

裏には、

ちから A -

すばやさ B

ぼうぎょ C +

まりよく F

しゅうちゆう C +

???? EX

称号 【異世界神の情け】 【異邦人】

と書かれていた。

ひと通り見て思うことは、ちからA - って馬鹿みたいに高いし、???? ってなにによって事だが、ミッテがないから聞けないし、これは人に合ってから聞くしかないかな。

「取り合えず、山頂を目指すか」

そう呟き、気合を入れる。俺は山頂を目指し登り始めた。目の前に広がる大自然を見ながら歩み始める、巨木の間には光が届きにくいのか、木と木の間は結構な間隔があるにも拘らず膝ほどの植物しかない。歩きやすくて結構なのだが。

小1時間ほど登った所で、ある事に気づく。上にあがるにつれて、少しずつ勾配がきつくなっているが、少しも息は切れないし疲れないのだ。少し走ってみようかと、小走りで駆け出し徐々に速度を上

げていく。坂を登っているというのに、元の世界記録保持者もびつくりの速度が出た。体感では80Km位は出ているんじゃないかと思うぐらいだ。

あつという間に山頂付近に着いた。そこは、殆ど木が生えておらずサッカーコート程の開けた場所になっていた。ここまで、魔物に合わなかった訳ではない。つと言うより目の端にチラツと映っていたのだが、かなりの速度が出ていた為に魔物が追いつけずに居ただけの事だ。だが、目の前に居るのには逃げられそうに無い。こんなこと言っていてなんだが、現在絶賛現実逃避中である。

そこには、鋭い牙に長い首、肩から先がこもり翼のようになっていて、筋肉が盛り上がった太い足と巨大な鉤爪、そして長い尻尾とまるで、ワイバーンつかむしろワイバーンな姿がこちらに大きな翼（端から端まで6mはありそうだ）を広げ威嚇している。これはまずい。つかか、不味すぎる。こっちに來て1日も経たずに死ぬのは勘弁して欲しい。

こちらが動かずどうしようか迷っていると、こちらが動かないことに業を切らしたのか、ワイバーンは鎌首を仰け反らせ勢いを付けて大きな牙を覗かせ首をこちらへと伸ばしこちらに首が届く直前に頭を半回転させ大口を開ける。その勢いに驚き、足に力を込め後ろにむかって飛ぶ。

「がつつ痛うつつ」

余りにも飛びすぎて広場？の端にある巨木に背中を強かに打ちつけた。その割りに痛くは無かった物の、癖で痛いと言ってしまった。少し恥ずかしい。体勢を立て直しそこから、ワイバーンを窺うとその場から動かずグルルルとこちらに威嚇するだけだ。

これはチャンスかもしれない、近寄らなければ大丈夫のようだ。と、

広場の端をワイバーンに威嚇されつつじりじりと進む。その間もワイバーンを窺っていると、大きな翼をはためかせ始めた。これは飛ぶ予兆かと身構えると翼に淡いエメラルドのような靄が集まり始め、ワイバーンはこちらに向かって翼を振り上げた。

振り上げた翼の先からエメラルド色のブーメランらしき物が無数に飛んでくる。かなり早いがそこそこの距離があつた為、横に飛んで避けると今まで居た場所が鋭い斬撃が打ち込まれたかのように巨木は斜めに切れ地面は抉られていた。チクリと左腕が痛み、半袖を捲ると僅かだが血が滲んでいた。

「ふふっ洒落にならん」

おもわず笑ってしまった、避けなかつたら上半身と下半身がサヨナラするところだった。これで逃げるわけにはいかなかったな。近づけば牙や爪が離れたらかまいたちと来たか、こりゃ詰んだな。

もう逃げるのは諦めよう。なんとかして、倒すしかなさそうだ。

その間も、ワイバーンは翼を振り上げかまいたちを放ってくる。それを右へ左へと飛んでかわしながら策を練る。

「避けてるだけでは埒があかないな、だが近づくのも危険だし」
近づけば間違いなくかみ殺す為とその長い首を伸ばさだろう。何か無いかと周りを見渡すとそこにはかまいたちの当たった岩が砕け破片になった石が転がっており、ひとつ手にとってみた。ソフトボールほどの大きさの石は驚くほど重さを感じさせない。それをワイバーンに向かって力を込めて投げてみた。

ブオンと風を切りながら石は胴体に当たると、すこし表面を削りかすかに赤い血が滲む。当たった衝撃に耐えられなかったのか石は粉

々に砕けてしまったが。それでも、むこうは攻撃を受けることが驚きだったらしく翼を止まってしまう、かまいたちが止まる。

これはいけるとまた石を拾い投げつける。数回、数十回と繰り返すと、そこ此処から血が流れ始めワイバーンはとある行動を取り始めた。

膝を落として何かを守るように身を丸め始めたのだ。なにか大切なものが腹の下辺りにあるらしい。ここぞとばかりに動かなくなったワイバーンに石を思いつきり投げつけた。なんだか可哀想な気もするが、ここで殺せないようならこの先、生きて行けないだろう。

俺はまだ生きていたいし、その為にはこれ^{殺し}が必要なら、やるしかないのだ。手近に石がなくなると、その辺にある小さい岩を（と言っても両手でなんとか抱えられるくらい）持ち上げてみた。重くは無ものの、大きくて持ちづらくよろけてしまった。

石による攻撃が止んだ事に気づいたワイバーンが、首を持ち上げようとしたりと所で体勢を整えた俺の渾身の投擲がきまる。勢い良く手から離れた岩は放物線など描かず、ただ真っ直ぐにワイバーンの胴体に半分ほど刺さりそれでも勢いが無くならなかったのか仰向けにドスンと倒れ、地面が僅かに揺れた。

もがく様に巨大な足をバタつかせ、最後の咆哮か血を吐きながら耳を劈くような叫び声を轟かせた。次第に動く足にも力が無くなって最後にはびくびくと痙攣するだけとなった。

この時、初めての戦闘は俺の勝利で幕を閉じた。

異世界降臨と初戦闘は？（後書き）

なんとか書き上げました。まだまだ、構想が固まりきっていません。ボんクラ具合に拍車が掛かってますね。すこし更新に間が空きそうです。毎日新しい設定が生まれるのは考えていて楽しいのですが、いかんせん纏まりに欠けるこの頭を如何にかしたい今日この頃。
誤字、脱字、報告お待ちしております。

戦闘以後

「はあはあ、死んだか？」

倒れたワイバーンを見つめ、警戒しながら少しづつ近づく。歩く足がなんだかぎこちない。緊張が少し解けたのか、膝が笑っている。プルプルと生まれたての小鹿のような感じの膝に両手でバシッと喝をいれるが今にも倒れそうだった。

仰向けに倒れ腹の辺りに岩が刺さっている姿はまるで小山のようだ。その刺さった岩の辺りから今もだくどくと血が溢れ出しており鉄の匂いが辺りを支配する。

ちなみに、俺は爬虫類は飼おうとは思わないものの嫌いではない。

痙攣さえしなくなった、その巨体の目の前まで来て恐るおそる血を避ける様に触れてみる。まだ温かい、そりゃあ今まで生きてたんだものと自分に突っ込みを入れつつあちこち触って歩きまわる。

温かく分厚い皮を触っているとなんだか、いまにも起き上がって来そうな妄想に襲われた。

冒険者ギルドがあるとと言う事は、このワイバーンも討伐？対象になっっているかも知れない。なら、討伐証明を持っていけばお金をもらえるだろう。その為には、ワイバーンを証明するものを持って行くしかない。それがどこだか知らないが、普通牙か、爪、あと尻尾くらいか。こいつなら翼って線もあるかも。

ちょうど腹の方に居たため、足に近づき野太い爪を掴むと取れないかと引く張る。すると、メリメリと嫌な感触が手に伝わり遂にはも

げた。もげた拍子にバランスを崩し尻餅を着いた。

少し悪態を吐き立ち上がると、もう一方の爪ももぎ取って頭の方へ
と行き牙も剥ぎ取る。それを、ズボンのポケットに入れた。かなり
はみ出したが、ポケットの蓋？を閉めると落ちそうになかった為、
よしとする。

一頻り取り終えると、先程までワイバーンが護っていた所にたどり
着いた。そこには、木を噛み砕いたような大鋸屑のような物が敷き
詰められており、その中央にはダチヨウの卵を大きくした卵が2つ
ほど収まっていた。

「こんな大きさの卵なんて見たの初めてだ。」

ダチヨウの卵なら、昔小学校の実験室に飾られていたのを見た事は
あるがそれよりもふたまわりほどでかい。白い殻に黄緑色の模様が
浮き出ているがこれがまさしくワイバーンの卵で間違いないだろう。
確証は無いが。

さて、どうしようか。

選択肢としては3つ、1つ目このまま放置、そのうち他の魔物に食
べられるか生まれたとしても生き残れないだろう。2つ目生まれる
前に潰し殺す、万が一生き残ったとすると人が襲われるかもしれな
い。最後は持つて帰る、これが大本命。RPGとかだとワイバーン
とかで空を移動するしな。

ただ、俺に育てる事は無理そうだ。今まで犬とか猫などの動物すら
飼った事すらないし、第一何を食べるのかすら想像つかん。

たぶん、モンスターテイマー調教士辺りがいるだろうからそこに売ればいいと思う。い
なかつたら売れるかどうか判らないがギルドとかで引き取ってくれ
ないかな。最悪駄目なら、潰すしかないが。

まあ、取り合えず持って行こうと持ち上げるが、両手に卵。あんま
り力を入れると割れそうだ。今すぐく卵用のパックが欲しくなった、
こんなにあれが卵パックあんなに素晴らしい物だとは思わなかった。でもまあ
入らないだろうが。そんな事を考え苦笑する。

この光景を人が見たら、危ない人認定されてしまう。だって考えて
も見る、ワイバーンが倒れている前で両手に卵を持って笑っている
姿。だめだ、黄色い救急車を呼ばれても文句言えない。

何かで運べないかと探すは何も見当たらなかった。しょうがないと、
上着を脱ぎ裾を縛り卵を並べて包んでみた。半袖の為、縛るとおぶ
るような物には出来なかった。片手で持てるようになっただけまし
かと考え、それより大事なことを思い出した。

俺がここに居るのは何の為だ？そんな事は決まってる。この先にあ
ると言う村に向かうことだ。でも、その方向がどの方向か戦ってい
るうちに判らなくなっていたのだ。

周りを見渡すが、自分の居る所こそ開けている物の広場の終わりに
は20メートルを越えるかというほどの巨木が生えており、余り見
通しは良くないというより視界が制限されていると言った方が正し
いだろう。

どうにかして、村のある方向を確認せねば、まともにとどり着ける
かわからない。

「そつだ。上から見れば一発じゃね？」
ちよつとバックステップしたくらいで有り得ないほど飛んだのだ、
垂直飛びでも相当飛べるはず、つとさつそく実験。結果は、まあ成
功と言えるんだらうが失敗したとも言えた。

足に力を込め、屈伸状態から一気に膝を伸ばす。重力を振り切るよ
うにもものすごい速度で空へと飛び出した。巨木を少し越えた辺りま
で飛ぶとすぐに上昇が終わり自由落下が始まる。ものの数秒で地面
に着地した。

ほんの数秒では、見れる範囲は少なく、何度も飛ばなくてはならな
い事に気づきたため息を吐きつつ卵は手に持ったままだと割れるかと
思い、10歩ほど離れた所に置いておき、そして何度も飛び上がる。

数十回、繰り返しただらうか、落ちる時の胃が持ち上がるような感
覚に気持ちが悪くなりつつ、なんとか村の方向がわかった。太陽の
向きを考えるとこの山から南西の方向にあつて、ここからだとな
り小さくつつすらとだが人工物である家らしきものが見えた。

「つつぶ、これで、なんとか、なりそつだな。少し遠いが、なんと
か、なるだらう」

目的地が見え、安堵とこれで人と逢えるかもとテンションが上がっ
てくる。

良しと、気合を入れ卵を包んだ服の所まで歩き右手で持ち上げる。
そのまま南西の方へ広場を歩きだすと、端の巨木の下から5分の1
ほどの所に鈍く光る物が見えた。

それは、深々と巨木に突き刺さつた剣で柄の部分の他は殆ど見え
ず柄頭が鈍く銀色に輝いていた。取らうと思ひ、巨木に向かつてジャ

ンプし柄を左手で掴んで木に向かって軽く蹴りを入れる。木が軋む音が聞こえ、ズルツと剣が抜けた。着地して剣を見ると小ぶりの片手剣だった。

刃の長さは肩から先と同じくらいで、鈍い銀色に光り所々刃が欠けている。その刀身は細く軽い。自分の力が異常だから、はつきりと判らないが、体感的にはペンと変わらないくらいに思える。

卵と剣を持ち替え右手で持つと、軽く振ってみる。上から下へヒュンと空気を切り裂いた。なんか凄そうだと木に向かって試し切りしてみる。

袈裟斬りしてみると刃の半分位まで簡単に入り、途中で止まる。斜めに入った線が途中で僅かに太くなっている。刃が垂直に入らなかったことが原因だと思われる。

片手剣
こんな物なんて初めて握ったから当たり前だとひとりごちる。

剣を使うなら誰かに教わらなければならぬかもな。気を取り直し抜き身の剣をベルトに差し、山を降りることにした。

戦闘以後（後書き）

かなり短いです。

俺じゃない誰か

剣を腰のベルトに差し、山を降り始める。

巨木の葉の間から光が差し込み意外と明るい。道なき道を降りているため、その速度は遅い。

辺りはとても静かで葉を揺らす風の音と地面を踏む音がかすかにするだけだ。そのまま30分ほど降りて異変に気づく。

「まったく魔物がでないな」

そう、登りでは凄い速さで上がった為に魔物がついて来れず遭わずに来れたが下りではそうは行かない。後ろに重心が移っており速度を出すと転びそうになる為に歩く程度の速度でしか動けない。この状態ならいくらでも魔物に襲撃を掛けられるだろう。

そう予想していたんだが、今の所は襲撃どころかまったく心配すらない。と言っても、心配なんて早々判る物でもないだろうが。

「まっ、襲撃が無いのはいい事だしな。まずはここを抜けないと何も始まらないし」

そう思い直してずんずんと歩き出す。もうお昼をとっくに過ぎて太陽も真上を通り越した。

もうお腹が空いてしょうがないものの、持ち物に食い物も無ければ食べられる草とかの知識も無い俺にとって、見たことが無いものだらけのこの世界は何が食えるのかすらわからない。

右手でおなかを押さえつつひもじいなと呟いた。何でもいいから飯

よカモン。

だめだ。思考が纏まらない。まだ、起きてから半日も経ってないのに何でこんなに腹が減るのだろう？村に着くで持てばいいがため息が出た。

オルデンサイド

木々の間から人の大声と獣の叫び声が響く。木々の間は広く所々伐採された切り株が地面から顔を覗かせている。陽をたっぷりと浴びた草花はのびのびと育っていた。

ここはニズク山の入り口から30分程登った所で、比較的弱い魔物や傷薬となる薬草が群生しており初心者や小遣い稼ぎの冒険者が来る絶好の狩場だったんだが、なぜか中腹以上に生息する魔物に襲われたんだ。

「おい、ジェミド。右から来てるぞ！気を付ける」
そうやってジェミドに注意を促すと応つと返事が返り、俺も身体強化の魔術を待機状態から発動状態へ移行し目の前に居たグランドウルフを一撃で首を飛ばす。

その間も、辺りに目配せをし警戒を怠らない。そして、身体強化を待機へと戻す。これは、体に負担が掛かる上燃費が悪く常時魔力を食われ続けるからな。

「何でこんなにいんだよ」
とジェミドは右から来ていたウルフ2体を相手取り愚痴をこぼす。そうこうしている間にも魔物は増え続けている。まずいと思うが逃げ場が無い。このまま逃げるには、手が足りないだろう。ここには俺とジェミドしか居ない、魔物を除けばだが。

そんな考えを切捨て目の前に迫る魔物にスナップを利かせた剣でけ

ん制する。

ウルフはバックステップでかわすとグルルと威嚇してきた。他のウルフより少し大きく毛並みも良く見える。

たぶんこいつが親玉だな。こいつを殺れば、統制が乱れて少しは楽になるはず。いや、なってくれ。

親玉のウルフは中々すばしっこくコチラの攻撃が当たらず、親玉に気を取らされすぎていると仲間のウルフが死角から攻撃してきたりする。

連携は中々なんだが、いかんせん唸っているだけに位置が丸分かりだ、さすが魔獣とは言え獣。不意を付こうとして、横から来たウルフに左手の鋼の籠手で殴りつけ体制を崩したところをすかさず一閃。前足が1本斬り飛んだ、悲鳴のような泣き声を上げているとあつちを片付けたジエミドが止めを刺した。

また1匹減ったな、後何匹だ？ひい、ふう、みいの、まだ、6匹以上いやがる。まだ、俺の魔力はあるが、もうそろそろジエミドの魔力は底を付くはずだ。あいつは制御が下手で効率悪いからな。

身体強化が無くても、ジエミドならこいつ等に負けはしないだろうが物量に物を言わして特攻掛けられたら怪我じゃ済まなくなりそうだ。

「オルデン！！悪い、魔力が無くなりそうだ。どうするまだまだいるぞ」

そう言いつつ、身体強化を解いたのか体の切れが無くなるジエミド。まあ、そこらの冒険者に比べたらそれでも強いだろうが。

分かってると返して、また身体強化を使いウルフを切り裂く。こりや明日は筋肉痛確定だな。明日まで生きればの話だが。さっさと殲滅しないとこちらがどんどん不利になるな。

そう思っていると、後ろの方から何か近づいて来るのが気配で分かった。嫌な予感がして、身体強化を使い目の前のウルフに前蹴りを入れそのまま前に向かって5メートル程飛ぶ。

着地し振り返ると巨大な黒い毛並みのブラックベアーがグラウンドウルフを吹き飛ばしていた。飛ばされたウルフが内臓を撒き散らせながら飛んで行き木にぶつかって落ちた。

「どうすんだ。ありやあブラックベアーじゃねえか」

こちらに近づきつつあるベアーに警戒するジェミド。ブラックベアーは山のかなり上の方にしか居ない筈。何故こんな所に高難易度の魔物がでたのかさっぱり分からない。

ベアーに仲間を殺されたのに怒ったのかウルフたちが一斉に襲いかかるが、それはなんと言うか瞬殺だった。

そのでかい凶体の割りに素早く、巨大な爪で切り裂き、両前足で踏み潰しその強靭な顎で噛み千切った。その姿は圧倒的な強者そのモノで勝ち目が無いのは明らかだった。

あっという間に、ウルフ達は壊滅しそこにはウルフの血で赤く染まったベアーと俺達2人のみとなった。

「逃げ切れると思うか？」

「無理だな、あんだけ動けるなら全力で逃げても追いつかれそうだが、何が何でも逃げられる状況を作らないとな」

そう言っただけだと少し希望が出たのか蒼白だった顔に気が戻る。ここから巻き返すのはしんどそうだがやるしかない。

まずは、小手調べと予備の武器であるナイフを投げつけた。黒く分厚い毛皮はまったく刃を通さずぶつかって落ちただけだった。

まあ、ある意味予想通りだ。これは、剣が通るかも怪しいな。だが、やらなければこちらが死ぬ。

「ジエミド!!お前は後ろに廻れ俺が引き付ける!!でかい一撃に注意しろよ。」

「大丈夫なのか？」

「お前が魔力使いすぎなのが悪いんだよ。あれ使わないと避けられないだろ」

そう言っただけで、身体強化を最大にする。一気にベアーに向かって詰め寄ると一太刀浴びせ、反撃の来る前に敵の射程内から退避する。高負荷の掛かった身体の節々がビキビキと音を立て始め、そう持たないことを予感させる。

もう一度と、一気に詰め寄り今度はなぎ払いを試みるが効果は薄い。一応傷はついている様だが浅く軽傷で所だ。ジエミドがその間に後ろに廻っていて間合いを詰めている。

これはチャンスとこっちで斬り付けながら、向こうには思いつき刺せと叫ぶ。

だが、刺して見たものの10センチも刺さらぬうちに動かなくなつてしまったようでジエミドはベアーが振り向く前に剣から手を放し距離を取り腰から大振りのナイフを抜き構えなおした。

いよいよもってまずい状態になつて来たな、打つ手無しとはこの事だろう。

どどん魔力も無くなって来てるし、体のほうも限界に近い。一撃離脱は出来なくなつてきたので真正面から来る攻撃をなんとか避けつつ、反撃する。

それでもむこうにしてみたらたいしたダメージは受けてないのだから勝てる気がしない。

そのまま無理くり避けていると身体の方が持たなかつた様だ。膝の力が抜けカクンと右膝を折ってしまった。ベアーはその機会を見逃さず、腕を振り上げ大振りの攻撃を仕掛けてくる。

当たれば良くて重傷、悪けりゃ即死の攻撃が迫り思わず目を瞑る。一瞬あとに、ドガツつという音が聞こえた。

何時まで待っても来ない衝撃におそろおそろる瞼を開けると、目の前にベアーが居なかつた。そこで左右を見渡すと左に吹き飛ばされたベアーが起き上がる所だつた。

ベアーの右肩は袂れ腕が辛うじて繋がつていていると言つた所で、左腕だけでなんとか起き上がった。

だが、次の瞬間灰色の何かが目に映つたかと思うとドカツとまた音が響き、ベアーの胸辺りに人の頭ぐらいの大穴が開いていた。そし

て口から血を吐き出したかと思うと、そのまま倒れてしまった。

何が起きたかさっぱり分からない。それはジエミドも同じなようでポカンとしたまま大口を開けている。

右側の方からガサガサと草を掻き分ける音がして、細身の男性が姿を現した。

「大丈夫でした？」

それが奴、非常識の塊との最初の出会いだった。

俺じゃない誰か（後書き）

遅くなりました。考えが纏まらず、文量が安定しませんね。どつにかしたいものです。

第1冒険者発見!! (前書き)

前の話の少し前から始まります。

第1冒険者発見！！

俺は順調に山を下っていた。少しずつ周りの景色が変わり始め、木の間隔が広くなってきたと思う。

所々、伐採されたたろう切り株が見えた。と言う事は、ここまで人が入って来ているという事だろう。そうなれば俄然やる気が出るという物だ。

それからまた少し斜面の傾斜が緩やかになる。歩く速度が一步一歩進む程度からゆっくり歩くほどになった頃、前方の方がなにやら騒がしいのに気づいた。

かすかに犬が咆える様な声と人の声が聞こえる。やっとと内心小躍りしながら駆け足位の速度で声のする方に向かった。

あと、50メートル位に迫った時やっと人影を確認するがどうやら魔物との交戦中のようだ。今行ったら危なそうなのでここで見てみよう。

臆病者と呼びたいなら呼ぶがいいさ。今出てっても向こうの足手纏いにしかならない自信があるぞ俺は。

襲っているのは犬を大きくした様な魔物で、もしかしたら狼なのかもしれない。鋭い牙がちらちら見えそんなのが、5、6匹ほど見えた。

戦っていたのは2人組みで、もしかしくなくても冒険者だろう。ずいぶん余裕がある様に見える。あ、また1匹斬った。凄い剣速で一気

に横に振るうと、狼の前足が1本飛ぶ。そしてすぐさまもうひとりが止めを刺している。

かなりのコンビネーションだ。そのまま魔物を圧倒している様に見える。えたんだが、なにやら少し小さい方の動きが悪くなった。それでも、少しも狼に触れさせず屠っている。

見ているとまた魔物が現れた様だ。それは、黒いヒグマの様にも見える。魔物で目の前に居た狼を前足で吹き飛ばした。腹の辺りが抉れ内臓が飛び出してちよつと直視しがたいグロイ光景が広がっている。

なにやら狼がお怒りの様子でヒグマもどきに向かって咆えると一斉に飛び掛った。だが体格が圧倒的に違う上に、あれだけでかいのにやたら素早い。

1分も掛からずに狼は肉塊に変わってしまった。しかも、今度は2人組みに目標を定めた様だ。

それに反応し、背の高い方がナイフらしき物を投げるがヒグマは意に介さず居たため行けるかと思っただが刺さらず弾かれただけだった。ヒグマはよほど自分の身体に自信がある様でそのままじりじりと距離を縮めだした。

そうしていると、背の高い方が凄まじい勢いでヒグマに近づくと剣を振るって振り切った直後にバックステップで距離を開ける。

背の低い方が距離を取って背後を取ろうと後ろに廻り始めた。もう一度近づき攻撃してまた下がる。ヒット&アウェイかうまいな。

また近づいて攻撃したと思ったら刺せと叫び、後ろまで来ていた背の小さい方がタツクルをかましていた。ここからだと良く見えないが、身体ごとぶつかる勢いで剣を刺したのだろう。

それでも、致命傷を与えられなかったのか後ろに居た奴が離れてナイフを抜いた。おいおい、どんだけ硬いんだよ。

とりあえずこつちもなにか用意した方がよさそうだ。剣はどうだ？、駄目だまともに振れないから却下だ。だからと言って卵を投げるわけにはいかないしなあ。

また石でも投げるしかないかと、足元を探し丁度いい大きさの石を拾う。それを持ち前に視線を戻すとヒグマの前に居た背の高い方が膝を突いていた。まずいと思い、すぐさまヒグマに向かって石を投げた。

ヒグマに向かって弾丸の様に飛んだ石は腕の辺りに当たり腕がありえない方向に弾んで倒れた。良かった当たったみたいだ。

だが、まだ死んで無い様で起き上がろうとしている。そんな事はさせないともう1個石を拾うとヒグマに向かって投げた。

今度もちゃんと当たり、胸に大穴が開く。それを見届け、警戒しながらも近づく。ヒグマは口から血を吐き出しながら倒れた。やっと死んだか。

低い草を掻き分け目の前まで来ると背の高い方がこちらに振り向く。

「大丈夫でした？」

とりあえず聞いてみた。何だが呆然としているようだ。ふと、奥に

目を向けると背の低い方がナイフを構えたまま呆けていた。そんなに驚く物なのか？。

「ああ、あんたが今のやったのか？」

背の高い方が聞いてきたので、はいと答え近づき手を差し伸べてみる。向こうは一瞬戸惑った様だが、すぐに手を掴み立ち上がった。

「ありがとな、ほんと助かった。」

感謝されるとなんか照れるな。しかもめっちゃこの人イケ面だし、髪は深い緑色で後ろに流し目は淡く黄色味がかっていて彫りの深い顔は渋いダンディ系だ。

俺はそつち系じゃないぞ言っておくが。って、誰に言ってるんだ俺は。そう考えていると不審に思ったのか声を掛けてきた。

「どうした？あ、そうだ助けてもらったのに名乗らないとはすまない。俺はオルデンってんだヨロシクな、後ろに居るのはジエミドだ。おい、ジエミド何時までも呆けてないでこつち来いよ。」

「あ？あ、ああ」

まだ少し呆けたままだがジエミドと呼ばれた男はこちらに近づいてくる。こちらは髪がブロンドで短く刈り上げていて、目は青だった。なんだか雰囲気がかう、豪快で感じがする。

「いやあ、助かった」

そつちってバシバシと肩を叩いてくる。やはり見た目どつちり豪快な性格のようだ。

「おい！、ジエミドお前は力が強いんだからそつちバシバシ叩くな。大丈夫か？」

オルデンがこちらに尋ねてくる。

「いえ、大丈夫です。まだこちらは名乗ってませんでしたよね。私の名前は結城と言います。よろしくお願いしますね。」
取り敢えず、下手に出ておこう。こちらの事をほとんど知らないしな。

「ああ、よろしくな、ずいぶん丁寧だなお前。所でさっきのはなんだったんだ？。飛び道具の一種か？その割には馬鹿みたいな威力だったが。」

そう、ジェミドが言う。

「いえ、これです」

そう言っておもむろにしゃがみ石を拾い見せる。そうすると、驚いた様子で嘘だろうと言うので近くの木に向かって投げつけた。ドカんとぶつかり木の表面が30センチ程抉れた。

「うう、嘘だろ・・・」

2人とも心底驚いた様子で木とこちらを交互に見ている。やっぱり異常だよなこの力。

「身体強化してるのか？」

オルデンが聞いてくる。身体強化って何だ？と聞き返すともっと驚かれた。魔法の1種か？良く聴いてみると主にこう云う事らしい。

曰く、身体強化とはやはり魔法の1種で身体に直接作用させる物らしい。ただ、身体強化と言っても限度があるらしく、普通なら1、5倍が限度でそれ以上すると身体が壊れるとの事。他にも色々有るらしいんだが、今はここを離れる為にまた後でと言われてしまった。

「で？、そろそろ移動するのですか？」

「その前にこれだけ倒したんだ。剥ぎ取らなくちゃな。」

「剥ぎ取りってやっぱりあれを？」

「当たり前だろ？、何の為に冒険者やってんだ。」

そう言われるも、まだ冒険者がどう言った物なのか把握してない俺は何をして良いか分からず2人を眺めるしかなかった。その間に、2人は手早く剥ぎ取りを行っていく。

その中で気になったのが、ヒグマもとい、ブラックベアー（まんまだな）をばらしている時に、身体の中から淡く光るコブシ大の石？が出てきたのだ。

気になって聴いてみると、お前ほんとにお前冒険者かと今度は呆れられてしまった。何でも、これは魔結晶と言い魔物はまず持っているんだそうだ。強ければ強いほど大きい魔結晶になり。この魔結晶は小さい奴は燃料に大きければ魔法具などに加工する為、良く売れるんだそうだ。

って事は、ワイバーンも持ってたって事か。惜しいことしたな、だが戻るのも面倒だ諦めよう。

こう云うのは、その時の運だと思って諦めるのが肝心だと思う。また登ったら日が暮れるだろう。異世界に来て始めから野宿は勘弁願いたいし。

というわけで、剥ぎ取りも終わり村に向かって歩きだしたわけだ。

第1冒険者発見!! (後書き)

取り敢えず3000文字辺りで上げます。いやあ、全然進みません
が気長に見てやってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3578y/>

俺がここで生きるわけ

2011年11月18日13時22分発行